



## 第105回 医師国家試験結果を振り返って

医学科同窓会 副会長 蔵 下 要 (3期生)  
(浦添総合病院 乳腺センター長)

第105回医師国家試験の合格者が3月に厚労省より発表されました。まずは合格された卒業生の皆さん、合格おめでとうございます。さて今年の琉球大学の合格率は83.7% (受験者数: 106名、合格者数: 88名) で、全国の医学部80校中73位、国立大学43校中42位という結果でありました。特に深刻であると感じたのは、新卒者94名の中で合格者82名と12名もの不合格者が出てしまったことでもあります。同窓会としては年度の早い時期から、国試対策委員や学生評議員とも連絡を取りながら、可能な対策や支援を行ってきましたが、結果として反映されず大変残念に思います。既卒者の合格率は例年並みでしたので、現役学生の成績を上げていくことが今後とも重要であると感じられます。

そもそも医師を志した医学生にとって、医師国家試験とはどのような位置づけになるのでしょうか？少なくとも最終目標ではなく医師になるための通過点であるのではないのでしょうか。高いハードルであることには間違いありませんが、しかし医学生である以上、誰もが通らなければならない道のりです。かつて、琉球大学医学部医学科の創設に尽力され、大学病院の初代病院長を勤められた小張一峰先生は、「医師という職業を英語に直すと“job”でも“occupation”でもなく“profession”なんだよ」と我々学生に口癖のようにおっしゃっておりました。つまり、医師として(あるいは臨床医以外の研究者であったとしても)、人間の命に関わる仕事に携わるプロになる以上、必要な「医学知識」が習得できているかを問う医師国家試験に合格するために最低限の勉強はしっかりやらなければならないということになります。最近の国家試験の傾向についての解説を読んでいると、単なる暗記問題よりも、病態生理を理解し、診断治療に結び付けていくという設問が増えてきているとのことでありました。これはまさに日々の臨床の現場で実際に必要とされる知識を問うているものであると思います。そうなるに臨床実習(ポリクリ)の中で見て、経験したことが大変重要であり、その中で国家試験に向けて勉強しなければならない本当に必

要な知識とは何であるのかを知ることが大切なのだと思います。

とは言うものの、実際に受験する学生たちにとっては、試験日程も3日間となり、求められる知識も膨大となった現在の医師国家試験を乗り切るためには、やはりきちんとした対策をとる必要があります。具体的な対策の内容に関しては、別頁で記事がありますのでここでは割愛しますが、少なくとも琉球大学の医学生に以前からありがちな「国家試験対策への執りかかりが遅い」という“習慣”は早く改めるべきではないかと思います。現在の臨床研修医制度が導入されてから、医学生は研修病院見学やマッチング対策など国家試験の勉強以外に費やされる時間が必要となってきています。これに、九山や西医体、各科の卒業試験が入ってくると、6年生になってから国家試験対策に費やすことのできる時間は必然的に限られてきます。卒業試験をもっと国家試験の内容に即して行うということも必要であると思われ、実際に同窓会としても医学部との懇談会の中で以前に提案させていただきました。しかし、もっと大切なことは学生自身がもっと早い時期(4年次、5年次の段階)から国家試験対策を始めることではないかと思われ、まず学生側としてできる対策はすぐにでも行うべきでしょう。一方で学部側としても学生のモチベーションを高めるために、基礎医学がいかに臨床にリンクしているかを学生に理解してもらうことも重要ではないかと思われ、例えば3年次のクリニカルクラークシップのような臨床体験の機会をより多く設けて、基礎と臨床をある程度フィードバックしながら講義を進めるなどの対策案も今後検討していく必要があるのではないかと思われ。

ぜひとも国家試験に合格したいという学生側の熱意、卒業生全員が合格して欲しいという学部側の熱意、その両方が求められているのではないかと思います。同窓会としてはその熱意に応えるためにどのような対策や支援が行えるのか、評議員会や学部側との懇談会等の中でいろいろなご意見をいただきながら今後とも考えていきたいと思われ。